TWOSTONE Agentic

AI駆動開発の進め方と、失敗する3つの条件

AI駆動開発とは何か。どう進めるのか。
そして、なぜ失敗するのか。

発注者側が検討段階で確認しておきたいことを整理しました。



©2026 Agentic Inc.

AI駆動開発とは何か



AIを活用して、ソフトウェアの開発プロセスを効率化・高度化する新しい開発手法です。

従来の開発に比べて、要件定義から実装・テストまでの各工程でAIを活用し、
より速く、より質の高い成果を生み出すことを目指します。

従来の開発

- 人が一行ずつコードを書く
- 工程ごとに担当者が分かれる
- 実装に入る前に要件を固めきる
- 変更が生じると手戻りが大きい

AI駆動開発

- AIエージェントが既存コードを調査する
- 実装の計画を立て、複数ファイルを修正する
- テストを実行しながら作業を進める
- 人は判断とレビューに集中する

区分	内容
↑ 変わること	実装にかかる時間が大きく短縮される。要件を固めながら実装を進められる。
− 変わらないこと	何を作るかの判断、品質の担保、業務そのものの理解は人が担う。

AI駆動開発は「人の代わりにAIが作る」仕組みではありません。作業を任せる範囲が広がったことで、
人が担う役割が実装から判断へ移る、という変化です。

©2026 Agentic Inc.

開発の進め方が、どう変わるか

要件を固めてから作るのではなく、作りながら固める順序になります。



従来の開発（ウォーターフォール）

要件定義 ▶ 設計 ▶ 実装 ▶ テスト

全工程を一度ずつ順に通過する

AI駆動開発

対象業務の確定 ▶ 実装 ▶ 動かして確認 ▶ 要件の確定

実装と確認を往復しながら固める

繰り返す

発注側にとって、何が変わるか

詳細な要件定義書がなくても着手できる

やりたいことの方向性が決まっていれば、
実装を始められます。

途中で方向を変えても手戻りが小さい

動かして確認しながら進むため、早い段階で
判断を修正できます。

判断のタイミングが前倒しになる

資料ではなく、動くものを見てから投資の可否を
決められます。

©2026 Agentic Inc.

実際の流れ（全工程）



現状診断から定着・改善まで、5つの段階で進みます。

① 現状診断 ▶ ② 戦略策定 ▶ **③ 開発・実装** ▶ ④ 導入・展開 ▶ ⑤ 定着・改善

PoC（試作による検証）は③の入口にあたります。

段階	主な作業	発注側が判断すること
① 現状診断	業務の棚卸し、データの所在と品質の確認	どの業務を対象にするか
② 戦略策定	効果の試算、対象範囲の絞り込み、構成の検討	どこまでの投資を想定するか
③ 開発・実装	PoCによる実現性の検証、本開発	検証結果を見て、本開発に進むか
④ 導入・展開	本番環境への導入、運用ルールの整備、教育	誰がどう使う体制にするか
⑤ 定着・改善	利用状況の確認、精度と業務フローの調整	継続するか、範囲を広げるか

いずれの段階でも、発注側には判断が求められます。

AIが担うのは作業であり、何を作るか・続けるかの判断はAIに任せられません。

©2026 Agentic Inc.

うまくいかないケース



ツールを導入しただけでは、開発は速くなりません。むしろ遅くなることがあります。

01 仕様が曖昧なままAIに書かせる

何を作るかが定まらないまま開発を進めると、動くものは出てくるが、想定と違うコードが大量に生まれる。結果、検証と修正に時間を取られ、従来より遅くなる。



回避するために

対象業務と、満たすべき条件を先に文書化する。
AIが継続して参照できる形で残すことが前提。

02 レビューできる人がいない

生成されたコードの妥当性を判断できる人が社内にいないと、品質が担保できない。動いているように見えても、例外処理や性能面の問題が後から表面化する。



回避するために

テストを先に準備する。レビューの担当と基準を、開発着手前に決めておく。

03 作って終わりにする

デモは動き、報告も終わった。しかし運用ルールも教育も設計されていないため、数か月後には誰も使っていない。投資が回収されないまま終わる。



回避するために

誰がどの業務で使うかを事前に決める。
運用ルールと教育を、開発と同時に設計する。

いずれも技術の問題ではなく、準備と体制の問題です。

©2026 Agentic Inc.

検討の進め方

小さく試してから判断するのが、最も損失の小さい進め方です。

検討時に確認したいこと

観点	確認すること
① 対象業務	繰り返し発生し、判断基準を言葉にできる業務か
② データ	必要なデータが社内にあり、参照できる状態か
③ 精度の水準	どこまでの精度があれば業務に使えるか、決まっているか
④ 体制	内容を確認し、判断できる担当者がいるか
⑤ 運用	誰がどの場面で使うところまで、想定できているか

PoCという選択肢

左記の5項目がすべて揃っていなくても、小さく試すことで確かめられます。対象業務を1つに絞り、短期間で動くものを作って判断材料にする進め方です。

・実現性を、着手前ではなく実物で確認できる

・投資判断を、小さい金額の検証から始められる

・見送る判断も、検証の成果として残る

AI戦略の策定から開発、現場への定着まで、同じ体制でご支援します。

特定のAIツールの代理店でも、自社プロダクトの販売元でもないため、

要件とコストから中立に構成を選定します。

お申し込み・お問い合わせ

株式会社Agentic

https://agentic-ai.co.jp/

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-22-3 渋谷東口ビル6F

東証グロース上場 株式会社TWOSTONE&Sons（7352）のグループ会社

©2026 Agentic Inc.